

夜の公園で美佐子を抱いたあの日から、私は、より強く優香を意識するようになっていた。

あの時美佐子を抱きながら「告白」した事により、私は自分自身に優香を印象付けてしまったのだろうか。

ときおり人は自分の心の動きを他人に話す事によって初めて、自分の本心を自覚する事がある。優香の椅子から立ち上がるときの身体の動き、キーボードをたたきながら時折見せる、考えこむ時の表情、スーツに包まれた背中から腰にかけてのライン、私に話しかける時の唇の動き、己の存在を誇示するように豊かに服を持ち上げている胸、屈みこんだときに強調される腰のスカートの張り。

そんな彼女の何気ない仕草の一つ一つが私を挑発した。だが私は仕事を順調にこなしてもいた。男性にとって仕事と女性の両立は比較的容易だ。自分の能力を女性に誇示したいと言う、本能的な意識の所為なのかもしれない。

「そこで立止まって」

私は美佐子の部屋でソファに座ったまま、バスルームから出てきた彼女に声を掛けた。

あの公園での日から五日が経っていた。仕事が大詰の時を過ぎ、後は仕上だけとなった今日、私は会社帰りに美佐子の部屋を訪れたのだ。テイクアウトのピザと赤ワインの中瓶、そして店員に頼んでラッピングしてもらった彼女が使っている香水を持って。

美佐子が少し怪訝な表情を浮べて私の前、二メートルあたりに立止まる。湯上りの香りがバスローブを羽織っただけの彼女の身体から私にとどく。

「そこで脱いで、見せてくれよ」

私は美佐子が入浴している間にワインを注いだグラスを持ち上げながら言った。

美佐子がためらいがちな微笑みを浮べる。

「見飽きてるでしょう……」

「一部分だけはね、でも決して見飽きるつてもものじゃないよ」

そんなふざけた調子の言葉に、彼女が微笑する。

「ばか……」

それでも美佐子は、私から視線を外しバスローブの紐を解きはじめた。床にタオル地の服が折重なった時、湯上りのほのかにピンク色に染まった裸体が蛍光灯の光の中に晒された。

彼女は反射的に胸と下腹部を腕で隠すが、すぐにその腕は外れ、瞳が私に向けられる。私は美佐子と視線を合し、そして手のグラスからワインを一口飲む。

彼女の裸体を私は眺める。湿った髪、首筋、なだらかで小さめの肩、小振りな乳房と既に固くなりはじめている乳首、薄く脂肪がのった腹とその下の手入れされた陰毛、豊かな腰と太股、そして長い目の袋脛とそれに続く足首。

私は手のグラスを美佐子に向けて掲げるように持ち、中のワインを通して彼女の身体を見る。

私の視野の中で赤く染まった美佐子が言った。

「まだ見るの、少し恥ずかしい」

私は美佐子の、そして女性の不条理さに笑いを浮かべ、ワイングラスを横のテーブルに置く。

「おいで」

美佐子が私の言葉に従い、歩みよってくる。シャンプーとそれに混ざった彼女の体臭と、そして微かに残る香水の匂いが私を包みこんでいく。

私は、目の前の彼女の優雅な曲線を描いている脇腹を、手で撫で下ろすように愛撫する。

「くすぐったいわ……」

手の下で身体がわずかに震えた。

両手を脇腹から胸の膨らみに向けてはわせ、乳房を手の中に捉える。既に固くなっている両方の乳首を親指で愛撫しながら、軽く、その柔らかさ確かめるように乳房を揉み上げる。

美佐子が溜め息にも似た息をつき、そのまま私の前の床に膝をつく。腕が私の首に回される。

美佐子が開いた唇からわずかに舌先を覗かせる。私が彼女の頬に手を触れるとその瞳が閉じられた。

唇が合さり、舌が絡まり合う。

長いキスであった。

私は唇を彼女の唇から少しだけ放し、そのまま彼女の上唇を私の唇で挟む。開いた彼女の瞳が微笑する。

背中に回した腕で彼女を抱き寄せ、そのうなじに唇をはわす。

先程よりも強いシャンプーの香りと美佐子の匂い、そして香水の残り香が彼女の火照った体温

のなかに立ちこめる。

私がある所に軽く歯を立てると、彼女の手が私の髪を乱しはじめる。

私はその時何故か、優香の事を思い出す。私が気付いてはいたが、意識もしていなかった事が美佐子の微かに残った香水の香りによって連想され、意識されたのかも知れない。

(優香はここ数日香水を着けていなかった……着けていたとしてもごく控え目だった)

美佐子が私の髪をかき回す手を止める。

「どうしたの……?」

女性の感だろうか……。

「いや……」

私は背中を撫でていた手を美佐子の乳房にもって行く、私の手にすっぽりと収まるそれを、私はゆっくりと揉みし抱きはじめる。

私はシャワーのコックをいっぱいに開く。

勢いよく湯が頭上から降り注ぐ中、私は美佐子を買っておいでくれた男性用シャンプーを手に取り髪を洗う。

私の閉ざされた視野の中で、バスルームのドアが開く音が聞えた。無理をして開いた片目に、湯の流れの向こうの美佐子の裸体が写る。

「待ち切れないわ……」

美佐子が囁く。

ほとぼしる湯の下、彼女は私の傍らに膝を付く。湯が髪のシャンプーの泡を胸から腹、そして足へと洗い流して行くその流れの中で、彼女は私のものを口に含む。美佐子の全身にも湯が降りそそぎ、乾きかけた髪が再度濡れて、彼女の頬に、肩に張り付いていく。

美佐子の巧みな口の動きで私はすぐに勃起を意識した。

彼女は勃起したそれを唇から放し、伸ばした舌先でくすぐるように愛撫しだす。湯が下腹部からそそり立った剛直に弾け、彼女の舌と顔に飛散っていく。飛沫を避けようと目を閉じた美佐子だったが、舌は確実に私のポイントを攻めたてる。

股間でそそり立つ剛直と、それを刺激し続ける彼女の表情。その陰媚とも言える組み合わせに、私は欲情の昂ぶりを覚える。

美佐子が剛直を握り、上下に擦り上げながら、屈みこみようにしてその下の袋に舌をはわす。違った快感が走る。

「もっいいいよ」

私が美佐子の肩に手を掛けると、彼女が立ち上がる。

湯が私と美佐子に降りかかる。髪が額と頬に張付き、まるで別人のように見える彼女が私に抱

き付いてくる。彼女の背中に腕を回し、湯を弾きながら抱きしめる。

彼女の唇が私の唇を塞ぎ、舌が差しこまれて来たとき、私は彼女の背中に回した手を背中に沿わせるように撫ぜ下ろし、尻房を揉む。

彼女の太股が、その愛撫に応えるように私の太股に絡み付いてくる。

美佐子が唇を離して私に問いかける。

「大丈夫？」

息が興奮で荒い。

私が答えるかわりに腕に力を入れ、彼女を持ち上げたとき、美佐子の唇が再度私の唇を塞ぎ、両方の太股が強く腰に絡み付いてきた。私は彼女の腰を自分に密着させるように引き寄せる。

「……」

美佐子が私の口の中でぐもった声を上げた瞬間、剛直が彼女の中に急な角度で挿入されていた。

美佐子が腰を私に擦り付けるように動かし、唇を離す。

興奮により熱っぽくなった視線が私を見る。

「後ろでして、この前みたい……そして前はシャワーで……して」

一旦腕の中から抜け出した美佐子がバスルームの壁に手を付き、腰を私に向かって突き出す。私は、そんな彼女の尻の狭間にシャンプーを振りかける。

白く精液にも似た液体が彼女の窄まりを彩った時、私は指を使って、そのぬめりをたっぷりと尻の狭間と、その内部に塗り付ける。

私はそそり立つ剛直を握り、じらすようにして亀頭を窄まりに擦り付けてから、腰をゆつくりと突き出して行く。

彼女が立った姿勢をとっている為か、筋肉が緊張して強い抵抗が感じられる。

剛直が彼女の窄まりを押し開きだした時、美佐子が微かな苦痛の声を上げた。

私は反射的に動きを止める。

「止めちゃ、駄目……」

美佐子が自ら尻を突き出してくる。

私は彼女の尻を掴み、そのまま一気に剛直を押し進める。

根元まで完全に挿入した時、美佐子が苦痛とも快感とも取れる重い声を上げ、そして食いちぎられるように強く締め付けてきた。

彼女の尻を下腹部で歪ませたまま私は、まだ私達に湯を浴びせかけているシャワーをフックから外し、前方から美佐子の股間に持って行く。

湯が激しく彼女の股間に浴びせかかる。

私は美佐子の尻に置いたもう一方の手を支点にして腰を振る。数回の前後運動で強すぎる圧力

が快いものに変化した。

湯気が立ち昇るバスルームに、美佐子の歓喜の声と、彼女を刺激し続けているシャワーの音が響く。



男の放った平手は、痛みよりもショックを優香に感じさせた。

中学時代の最後にと、別の高校へ進学する女友達と企んだちよつとした冒険。お互いの親へのアリバイ作り、外泊、夜の繁華街。

自分がいけない事をしている事は当然自覚していた。しかしその自覚が一層彼女達を駆立てたのかもしれない。

お互いに、相手が無理をしている事を承知していながら、平静さを装って入った場末のライブハウス。

音楽と言うよりも「音」そのものに還元されてしまった強烈な「音楽」。日頃口にする事はないような、卑猥な言葉を羅列し続ける「歌詞」。

そんな、今まで馴染んでいた世界とは隔世した光景に、茫然と立ちすくむ彼女達に声を掛ける二人組の男。

軽快な口調と、その頃の彼女達には好ましく見えた容貌、格好良く見えた服装。咳こんだだけの初めてのタバコ。ウオッカが混ぜられた、見た目だけは綺麗なカクテル。

そして、片一方の電灯が割られた街灯だけが薄暗い光を投げかける、人気のない駐車場。

いつのまにか優香は友人と引離され、一人の男とその男のものだと言う車のシートに座らされていた。

男が乱暴とも言える態度で優香の唇を奪う、それまで押えていた恐怖心が一気に彼女に蘇る。顔に吹掛けられる、タバコの悪臭が混ざり興奮に荒くなった男の息、服の上から彼女の胸を痛いほど強く握り締める男の手。

優香は悲鳴を上げ、男を押しつけようと激しく腕を突っ張る。だが昂ぶった男の力は異様な程に強い。

ニヤついた男の表情が一層優香の恐怖心を煽る。男のもう一方の手が彼女のスカートの中に押

し入ってくる。

優香は、とっさに彼女の胸を揉みしだいている男の手をかきむしる。恐怖が優香に日頃以上の敏捷さを与えていた。男の手の甲に深い傷が彫りこまれる。

男が悲鳴を上げる。恐ろしい程の量の血が手の傷から流れ出し、男の服の袖を赤黒く染上げていく。一瞬男は声を失い、茫然とその光景を見守るが、それは優香とて同じだった。

正気を取り戻した男の表情が怒りに歪む。男はその傷つけられた手で、力一杯優香に平手を放つ。

男の放った平手は、痛みよりもショックを優香に感じさせた。

男の手から飛散った血が優香の顔に降りかかる。

男が発する、暴力と血とセックスに興奮した声と息。服が乱れ、裂ける時の音、スカートが捲くり上げられ、下着がはぎ取られる時の絶望感、肉体を陵辱される苦痛と屈辱感、そして恐怖。その全てが渾然一体になり、優香の肉体と精神を犯して行く。

優香は、興奮した男の前には無益とも言える抵抗をくり返す、だがその彼女の抵抗がより一層、暴力とセックスに酔った男を興奮させる事を彼女は知らない。

男が再度、優香の両頬をビンタで殴りつける。

唇が避け、自分の顎に流れ出した生暖かいものを感じた時、優香は肉体的な恐怖と深い絶望とを感じ、抵抗を止める。

男の顔が薄笑いに歪む。その男の浮べた表情が、彼女の精神に深く刻みこまれる。

優香の身体は、半ば失神したように力を失う。

それから男が優香の肉体に行った陵辱を、彼女は記憶に留めてはいない。ただ、無理矢理に押し広げられた足の、その中心部に走った強烈な痛みのみが、その記憶の全てであった。



優香が目覚時計の音に救われ、目を覚ます。

睡眠は充分に取ったはずなのに気分は悪かった。またあの夢だった、今までの人生での最悪の事件、中学生の時のちよっとした冒険心が引寄せてしまったあの事件。

長い年月があつた事件を漂白し、その骨格とも言える最悪の部分が、今だ彼女の心に澱のように

わだかまり、時折彼女を苦しめるのだ。

実際あの事件は優香の精神に深い傷を残した。過去った年月が、なんとか彼女から表面的には事件の影響を取り除いてはいたが、その心の最深部には今だ男性への恐怖心が、巢に隠れる小動物のようにうずくまっていた。

実際彼女はその事件以外でのセックス（あれがセックスと呼べるものであればだが）を知らなかった。恋愛は何度も向こうからやって来た、だがその何れもが惨めな結末に終わっていた、そして彼女は、その原因のかなりの部分がある事にある事を自覚していた。

そしてもう一つ、あの事件は優香にある歪んだ性癖をもたらせていた。

正常な人間ならば誰しもが持つ性欲、それを押え続け続ける事により歪みが生じ、その結果として彼女の精神はバランスを失し、そのベクトルは間違った方向に向けられていたのだ。

優香はベッドを出て、バスルームに向かう。

少し熱い目に調節したシャワーの湯を全身に浴びながら、彼女は思いを巡らせる。

最近あの夢を見る事が多くなった、原因は解っていた。勤めたばかりの今の会社にはじめて出社したあの日の夜、公園で盗み見た、あの光景……。

優香の性癖とは、他人のセックスを盗み見る事で喜びを覚える事、つまりピーピングであった。視覚が直接に性欲と結び付く事が少ないとされる女性にとっては、珍しいとさえ言える彼女の性癖であったが、自分が心の底で恐れるセックスを行い、喜びを感じている他の女性を見る事によって、その克服を無意識の内に願っているのかも知れなかった。

あの夜公園で、優香は勤めたばかりの会社で自分の教育係となった男と、その恋人らしい女性との痴態を盗み見た。自分の知っている男のそのシーンを見た事は初めてであり、彼女は強い興味と欲望を覚えたが、それ以上に、その男が行為を行いながら相手の女性に言った言葉、——今日入社した女性の香水の匂いに欲情した——が彼女に強い印象を与えた。

それはまぎれもなく自分の事であった。

あの夜、家に帰り着いてから優香は、いつもより激しくマスターベーションを行った。

その決して完全には満たされる事のない快感の中で彼女は、何度も男の言った言葉を聞き、男の恋人が男のペニスを咥え、その精液を飲みこんだ光景、男に向かって自分の最も秘めた部分を自ら晒した女の姿態を、見ていた。

そしてその女性が、まるでフラッシュバックのように自分に置き変る光景を、想像の視野の中に見ながら優香は完全には満たされぬピークを食った。

優香はシャワーを浴びながら、あの夜の事を思い返していた。また微かに欲情が蘇り、彼女は

無意識の内に太股を寄合わせる。だがバスルームの窓から差こむ爽やかな朝日が、それ以上の欲望を彼女から拭い去っていった。

同時に優香は悲しさを覚えた。他人のセックスを盗み見てマスターベーションに耽る事しか出来ない自分に、愛と男性とセックスを欲しながら、踏切る事の出来ない自分に、そして今だ過去の事件から脱しきれない自分に。

優香は顔をシャワーに晒し、心ならずも流れ出た涙を洗い流す。快いシャワーの湯が顔に全身に降りそそぐ。

優香はそのシャワーの湯の中で、ある決心をした。

髪をドライヤーで乾かした後、洗面所に付属した戸棚を開ける。中に並んだ色々な化粧品の中から、優香は愛用の香水を取る。ここ数日、男の言葉が気にかかり付けられなかった香水だった。

優香は鏡に写る自分の顔を見る、そして決心するかのように、自分自身に肯きかけると香水を手振り出し、うなじに付ける。

鏡に写る優香が少しだけ微笑んだ。



ファイルに落したテストデータを、組み上がったシステムに流しこむ。数秒の間、ハードディスクのアクセスランプが頻繁に点滅をくり返し、評価プログラムがCRTに次々とシステムの間出力結果を表示して行く。今のところ表示されているメッセージは全てグリーンだ。このままエラー結果を示す赤い文字が表示されなければ、ここ数ヶ月間の苦勞が報われた事になる。

私と優香、そして上司を含む三人の同僚は、一見平静を装いながらその実緊張してCRTを見つめている。

そしてその人間達の緊張を完全に無視するかのように、評価プログラムは何事もなかったようにその実行を終える。

結果はCRTに表示される一連のメッセージが示していた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| — | S | y | s | t | e | m | E | r | r | o | r | C | o | u | n | t | 0 | — |
| — | I | / | O | E | r | r | o | r | C | o | u | n | t | 0 | — | | | |
| — | T | o | t | a | l | E | r | r | o | r | C | o | u | n | t | 0 | — | |

CRTの後ろに設置されたプリンターが動きだし、拡大された文字を印刷した紙を吐き出しはじめる。

全員がその方向に目を向けた。評価プログラムには印字ルーチンはないはずだった。

その評価プログラムを作成した同僚がプリンターが吐出した紙を取り上げて他の全員に示す。

「ほらマシン様の仰せだ」

——皆の者よくやった。誉めてつかわす。我が体内に入りしコードは非常に美味であった。——

——ただ次からはもう少し「注釈」のスパイスを増やし、他の者にも理解しやすいコーディングを心掛けるように申しつける——

——そして我が身体を初めとするマシン資産を有効に活用する為に開発のスピードを早めるように命ずる——

——我々マシンが日頃受け持っている作業と比較すると完璧とは言えぬ今回の仕事——ではあったが、まあ人間のそれとしては評価出来るものでもあった。

——今宵はアルコール系物質含有液体でも摂取し肉体と精神のメンテナンスを行うが良いであろう。——

プリントを示す同僚が押え切れない笑いを吹出し、その同僚が仕組んだ悪戯に全員が笑い声をあげた。



私には本来、酒類を飲む習慣があまりない。多分、酒を飲むと言う行動自体が興味の対象であった学生時代を別にするに「付き合い」による飲酒の必要がなかった所為なのかもしれない。

だがやはり、一つ仕事が終了した時に、同僚達と飲む酒の席は楽しいものだった。

特に今日は優香がいた、男性ばかりで飲む酒はともすれば尻窄みになりがちなものであったが、女性が居るとその席は華やぐものだ。

私は軽い酔いも手伝って、隣に座る優香にここ数日気になっていた事を聞く。

「香水、今日は着けてるんだね、最近を着けてなかったけど」

「え、ええ、そうなの」

彼女の意味が掴めない返事。しかし私はその時一瞬、優香の表情がこわばったのを見たように

思え、聞い返す事はしなかった。

一件目の店で上司が帰り、二件目の店で、時計と終電車が皆を急かしはじめるまで飲んだ後私達は解散した。

まだ人通りの途切れない夜の街を私は一人で駅に向かう、ふと時計に目をやる。

美佐子はまだ眠ってはいないだろう、電話でもするか。

私は昨日美佐子を彼女の部屋のバスルームで抱いた事を思い出す。恋しさと酒の酔いも手伝って欲望が頭をもたげる。

公衆電話にテレホンカードを差しこもうとする私の肩を誰かが叩いた。手を止めて振り返ると、そこに優香が立っていた。

「あれ、帰ったんじゃない？……？」

驚く私に優香が、緊張をうまく隠し切れていない微笑みを浮べて言う。

「お話ししたくて後を付けてきたの……」

「話？」

私はテレホンカードをポケットに戻し優香に振り返る。

優香は私を見詰め、暫しの躊躇を見せる。

「そう、私の香水と貴方の恋人の話」

優香の表情が緊張を解く。もう踏出すのに勇気が必要だった段階は終わった、後は今日、心の中で繰返してきたリハーサル通りに事を進めるだけなのだ。

「良く解らないけど……？」

私は優香に聞く。

「私が貴方の恋人と同じ香水を着けていて、それで貴方が……私に興味を持ったって言う話……」
私は数日前の夜の公園での美佐子とのセックス、そしてその行為の最中に彼女に話した事を思い出す。

声を失う私に、優香が言った。

「見てたの、それが私の悪い癖なの……」

優香が顔を伏せる。



私は優香を伴って入った喫茶店で、正面の席に座る彼女を見ていた。やはり恥ずかしいのだろう、視線を、私と合す事を恐がるようにテーブルに置かれたオレンジジュースに向けている。その頬がわずかに紅潮していた。

逆に私は落着きを取り戻しはじめていた。回りのテーブルの客に聞えない程度の声で優香に話しかける。

「つまり君は私と美佐子との事を公園の茂みに隠れて覗いていたって事か、それで美佐子と同じ香水を着けるのを止めた……」

私は言葉の切り、その次に続く言葉を心の中で囁く。——そして今君はまた、その香水を着けはじめている……。

私は優香を見詰める。

「でも何故そんな自分の秘密をオレに話すんだ？」

私の問いかけに、優香が唇を湿すようにオレンジジュースを一口飲む。

「……助けてほしいの……。私、その癖を治したいの……。貴方は……。そう、私に興味を持っているわ……。だからこんな事をお願い出来るのは貴方しかない……」

私は、相変らず私の視線を避け続ける優香を見つめる。そして自分の赤裸々なプライバシーを私に打明けなければならなかった彼女の心と、再び美佐子と同じ香水を着けて私の前に現れた彼女の気持ちを考える。

私はわざと、優香が言葉にし難い彼女の本心を口にする。それが今は多分彼女にとって最良の方法だろうと思ったからであった。

「つまり君は、私が君に欲情し、君を抱きたいと思ったから私に告白した。つまり抱いて欲しいのか」

それは質問ではなかったが、優香は身をすくませながらも肯き、そしてもう一口オレンジジュースを飲む。そして再び私に向けられた瞳には、心を決めた女の、わだかまりを振り切った者の表情があった。

「はい……」

優香が囁く。

私はそんな彼女のテーブルの上に置かれた手に自分の手を重ねる。

「辛かったろう……」

思わずもらしてしまったその言葉に、私を見詰める優香の瞳が潤みはじめた。



私は、優香が私の部屋のバスルームでシャワーを使う音を聞きながら、美佐子の事を考えていた。

美佐子は私から優香を抱く事をどう思うだろうか、もちろんテレビドラマ的な一般常識から言えば答えは簡単だが、どうも私には美佐子がそんな反応を示すだろうとは思えなかったのだ。

自分と私の欲望に忠実であり、不必要なタブーをセックスに持ちこむ事に抵抗感を持つ美佐子は、むしろ優香の過去に同情を示し彼女にセックスの喜びを教える事に積極性を示すかもしれない。そして何よりそれは美佐子にとっても非常に刺激的な事のはずなのだから。

以下、次回へ